



雨夜乃燈

偵刑湯淺元禎新共衛
芝蘭堂秘笈

重文

洋学文庫
文庫 8
A 52



江之築地橋前橋向
中通及屋敷町東側
大槻



大槻文庫

此書ハ寛政六年甲寅於田伯元勤借し
と字一筆しるす其前後は
御先く代桂山公御年ありしに
也し御些事同知をせしれ將く
行儀と引せられし経書の新義
抄なり又布於古々買置良辰の
集紙せしものも賜り求めし
撰り求むしと御書にのめを
りぬ銀毫遺事奉 翹楚編の
抄りせしものも予時甲寅の

公卿圖に入らば終るべきやしよありけりい書成
杉田氏より切り得たりと云ふべしこれに云ふしを
其年の殊に志徹切らざる確言の類感激
姑くこれと評しこれに朱もく批点を施
しこれと評しこれと評しこれと評し
之と云ふ 公卿圖に終るべく同定書して
親しくし伊藤成貞と名づつ同附の序を云
りしついで考見先ツ熟読し其意を思ふるあり
とて終るしついで評しこれに朱もく批点を施
しこれと評しこれと評しこれと評し

して此書も作られたと見と終るべく同定書して
是なりと云ふべし此書の初巻御系府あり
故に千奇のありと云ふは 文法 此書は
後漢の書
其書と云ふは初巻の初巻と云ふは
御系府の初巻と云ふは
文法 此書は
後漢の書
御系府の初巻と云ふは
文法 此書は
後漢の書
御系府の初巻と云ふは
文法 此書は
後漢の書

強ちら事なりしを時文流りぬれしはと御儀と云ふ
一は近侍の事と云ふも再通語を流し給ひし所
自りも一通なりしに誦讀せられしを感
於れぬしに御作られしと傳へし所の條に
御んもその事なりしと云ふも御事と
仰を恨みし事なりしと云ふも御事と
兼て云ふ事なりしと云ふも御事と
批とを加しし御事と云ふ事なりしと云ふも
為れ多しと云ふ事なりしと云ふも御事と
御事と云ふ事なりしと云ふも御事と

に云ふ事なりしと云ふも御事と
御事と云ふ事なりしと云ふも御事と
と云ふ事なりしと云ふも御事と
なつても御事と云ふ事なりしと云ふも御事と
あつたひし御事と云ふ事なりしと云ふも御事と
人と云ふ事なりしと云ふも御事と
と云ふ事なりしと云ふも御事と
と云ふ事なりしと云ふも御事と

文化十三年丙子の御事の内旬

ふし翁仙拾啓 小茂受
行

道書かと後し

雨夜のせと火

秋雨乃秋すよを焼と帯く古記物所記書
集ぬとハ小紙あへぬおのとりとてしる

備前國臣 湯清元禎輯

権現様豊后太閤御對面の時太閤家所持の乃を
粟田口吉光銘の物より始て天下の窓として物を
皆集め作とて指をかりて立りされぬ物
道々秘藏の窓物の河やとてるのり
くのものなる由 権現様

却西一馬のやうな時 権現様仰らるるも
家おははち程の物をもいじ我を主格と仰り
思ひ入火の中あの中へ飛入命とらるるも
あせぬ士と仰り 正格と仰り 士五白御務と
仰り 連りて 甲申古格系別あかき流し 此歌の
○ 此士先証主格の密物と仰り 平生秘務よ 此由
湯谷河りるれ 大同赤面と仰り 西言たりる
権現様御府あ 河津名は地 大御所様と仰り
右徳院様 江戸御府 山むら成二の丸と仰り 二月御

湯谷河りるれ 権現様御府あ 河津名は地 大御所様と仰り
○ 此士先証主格の密物と仰り 平生秘務よ 此由
湯谷河りるれ 大同赤面と仰り 西言たりる
権現様御府あ 河津名は地 大御所様と仰り
右徳院様 江戸御府 山むら成二の丸と仰り 二月御
まは年若紀今 権現様御府あ 河津名は地 大御所様と仰り
なうし 花と候りて 菓あを持せ 喜まきと仰り 志の
むやふやれり ちよきさみもあぬつき 此家と仰り
とやまきと仰り 隔る河り 下油がら 揚り能と仰り
仰られぬ 阿茶の局 河津心のはり 上喜と
湯谷河りるれ 花と仰り 十八歳女中 才一の若人なり
しと仰り ありはり 河津と仰り 下女子 菓あを持せ 初ね
の以 裏道あり 志と仰り 女と仰り 河津と仰り

馬よりかゝりしやきれハ 右徳院様御上と
石釣せぬふく子花系りく 法座の戸と書しれ
まれハ 右徳院様法自乃戸とゆきせられ花紙
上平ふ沙車一葉あを法座の戸ハ 大徳院様法
下きるふくしとく 法座の花よりゆきれと
先ふ沙車よりあ戸のあく 山遠くゆきれハ 花が
初ききくしとらふいふあゆみ初もゆきゆき
くゆきるゆきとゆきれハ 徳院様まゆか 将軍
律系分一の人や家もくごとかききゆきゆき

上ききゆき系

○ 参河国善乱京の合戦ハ 徳院様沙打負ゆき
流松とくしと 法人頼朝とあめ 甲州の侍古ゆき
伯耆下印と 悪席毛の馬少家と 陰とハ 持取再
洋と勝とく 度とゆきと 武志とゆき 徳院様
を追はるく 討とれとゆき 追とけとゆき 沙馬と
残とく 付とゆき 徳院様も 沙付死
り 沙馬とゆき 沙馬とゆき 追とせられし時
夏月長なる 家ハ 沙付死の場ハ 追とゆき

能なりきりぬてやられぬ甲北多きやかく河とそを能言
家ホ武也河と思ひ着江州とそ方なりとの思ひ言
と語らり胡解其海海一ゆら園と京の合致も
皆家ホ一分の物や大徳と切崩しとらそ後
大東あれ場のわがりたれもけはも者あつた
アもるあは海海いふよかせくとも 赤ああなる句
とく脇をよもそけ江との赤成機好や但馬と
あふみけあれく小但馬足むきもせずいふるゆか
後き武人のあよ武也よししきりぬていふか想な

る中連根小ゆりしきりぬ甲州赤勝をきてや父が
うくせよらん河事そとまうれぬ但馬打心
とまつかく能河やとあは武也よしもあふ歳な
事小合はる仕はる句もきりぬとあ事なる度と
きりぬぬもあはしよ江人と山を連らぬ江州を
山仕合も山物あはと山あはん山物く山あはあ
るあは山物今山連軍小山連らぬいつも山通り
と思ひ大成不足と山たはあは味方連軍の時
山あはとあはらぬ一と山江州山物をて山あは

山生村の山崎よりいふ山生村の大将の武蔵守
 物よりいふ山生村の陣方よりいふ軍子務よりいふ大御の
 武蔵守よりいふ殿様の武蔵守大事の御まよりいふ
 か松の御い中よりいふ言よりいふ合名よりいふ系よりいふい
 けよりいふ山生村の御者よりいふ山生村の御中よりいふ相持
 守よりいふ能く守るよりいふ大御守よりいふ大御守の御
 古よりいふよりいふ大御守よりいふ大御守の御
 なるよりいふ事よりいふ只一人よりいふ討死よりいふい

善哉その海よりいふ様よりいふ成よりいふ又
 野よりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふ
 次よりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふ
 池よりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふ
 甲斐よりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふ
 まよりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふ
 るよりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふ
 音よりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふ
 とよりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふさよりいふ

流るるをいふべきはしとせし但馬は武蔵に比し
うけ音々扇様は酒法にまじりしきと少孫平
山立をいふ目も交りしはあらしとつゆあつる昔し
あつるをいふはとせしをいふとせしはう昔は
きよくといはれし様はあらしはうの交り
あつるはしとせしは酒法にまじりしきと
きよくといはれし様はあらしはうの交り
扇様は別れ扇様はあらしは但馬をいふ
とせし但馬は高湯家の武蔵目も交りしはう

音々下お和し河のほとけん時武蔵の山立をいふは
河のほとけんとせしは酒法にまじりしきと
流るるをいふべきはしとせし但馬は武蔵に比し
うけ音々扇様は酒法にまじりしきと少孫平
山立をいふ目も交りしはあらしとつゆあつる昔し
あつるをいふはとせしをいふとせしはう昔は
きよくといはれし様はあらしはうの交り
あつるはしとせしは酒法にまじりしきと
きよくといはれし様はあらしはうの交り
扇様は別れ扇様はあらしは但馬をいふ
とせし但馬は高湯家の武蔵目も交りしはう

○ 本多氏後者の言に三浦とせしむの外直言と
出づる也 右徳虎様より言ふ事ありしに
権現様三浦より言ふ事ありしに
一万石許りあり 権現様三浦は神官と
明成たるに言ふ事ありしに 上言ありしに
將軍様は神の所は言ふ事ありしに 上言ありしに
かゝる言ふ事ありしに 上言ありしに
権現様三浦は持病ありしに 上言ありしに
この時 寺あり八九年言録と評するに 上言ありしに

○ 右武藏守様言ふに 寺より言ふ事ありしに 上言ありしに
の事ありしに 権現様 上言ありしに 上言ありしに 判官
殿の御なる言ふ事ありしに 上言ありしに 上言ありしに
曹平寺様の三浦言ふ事ありしに 上言ありしに 上言ありしに
の事ありしに 上言ありしに 上言ありしに 上言ありしに
本下紀傳 ^{八百三十三} 事ありしに 上言ありしに 上言ありしに
上言ありしに 判官ありしに 上言ありしに 上言ありしに
右武藏守様言ふに 上言ありしに 上言ありしに 上言ありしに
河平判官ありしに 上言ありしに 上言ありしに 上言ありしに

まじりぬ中より口移く何由り出されし曹操様
才の白きもの肥州の理合に物を天朝を命が為し
しをらるるものより此の罪成りてんを命に極し
て来しとてよ此の罪成りて合意改命書物に
よみ業の何れに此の罪の道なき事と一人を執り
ぬきよあまより思案分別改命の聖賢のあきと
誓り古より一應をさあてし志れずや此の罪成り
道と合意改命に物を天朝を命が為し
改りよく少政の初を命に改命とて此の罪成り

新皇帝様と申すは上の道に有しとて法
常よりありり

○板倉圓助さま 大敵院様にいらし一巨勢
ありとて 権現様軍中より御成能く 上
とてとよりとて 此の罪成りて少政とて
其の事より少政とて 此の罪成りて少政とて
されは是ハ 権現様少政より少政とて
少政とて 此の罪成りて少政とて
人の事より少政とて 此の罪成りて少政とて

お毎しそり子孫のそり子孫の所りそり
せし今り中取うけたれらぬとて下れ格う
志願いんさぬに計するそりそりそり
しそり心とて

○ 板倉信重の指を系約法に成る者嫡子周防守宗
二男内膳守宗二人を江戸にあり

大敵流様孫の所りそりそりそりそり
かき成りそりそりそりそりそり
即ち所前におり判のそりそりそり

上意と承り理曲のそりそりそり
周防守宗のそりそりそりそり
そりそりそりそりそりそり
さそりそりそりそりそり
理曲のそりそりそりそり
信重のそりそりそりそり
漸の所りそりそりそり
信重のそりそりそりそり
そりそりそりそりそり
そりそりそりそりそり

あて御着とまきし海に上られし内務西一人也しそ
後又一万石沙州橋下野國多山の賊とふら御着
は内務正取の時より詩詠と好し家内お世より
られ後お慈成り了分つ人ふなりあひお言言新多し
事取あてか常川浩おの防のお白川か加茂川四軍
の弓矢と流せ又雜鳥の住あり市東とつあぬ教町
水流は紅木の園たしなるくか常川の田地と東く
川筋と流れ山崎と築れふ内務正取なるまの
田地のち氏と紅徳とあるふ日向如きんふ内務

正の位牌と誤け跡ととありし内務正取ふ今
譲られし世お全取お取とかきあ有るふとと誤
名はけしけり梅お大長きる人子邊多し下土
民共善取のつとを取河を可と権重人そん此
吾知ぬまじしお取と申族服なるも人の言と
お取け流しとるるそも人の言とぬまじなり
申有る人ふら下の言とつとる流と天邊を
命せられしあふ人の言とぬまじと命の流とつと
邊の大なる物とつと云ふ言とぬまじ人の言とぬまじ

御心と其の心とを以てしるべし。又天物又
周防子先の法に依りて人の生れは其の如く
有申す所なるものありげなるを以てしるべし。
人言はば少くも人との善事を云ふは其の如く
言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く
し。又世に人此の事を知るは其の如く言ふは其の如く
その如く所要の事也と親大徳の如く戒られしと
之れ。主振の如く言ふは其の如く言ふは其の如く
又云れ、徳の如く言ふは其の如く言ふは其の如く

大なるものや徳の如く言ふは其の如く言ふは其の如く
事也誠と申すは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く
なく一向の物と申すは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く
きと其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く
石をも月をも其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く
毎に其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く
其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く
徳の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く
其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く言ふは其の如く

新小傳の法とて自身第一小とて与れ
時の細如

束ぬなれ心も事もおれ

まかせく己が力して安を待

○大敵院様の沙時ち全但馬を敷まご少男を
心もさあり子細さきあり所れは
大敵院様沙上流あり不但馬を思へ御
とら登らぬる親縁家来さめりあはれも
常々やうを京女を思へけり思ひあはれ

阿の時 大敵院様あれの事但馬を付しや
上意あられんを思へ但馬を思へ過言を思へ
所をさし上られ大敵院様家来に思へ
必京女あり所づき但馬を思へ御を思へ
う方く法ある御を思へ東の事女を思へ
進り心を行御前を思へ上意女を思へ
ゆより事らぬよかりなんや御を思へ
とら御を思へ心音の御を思へ
京女を思へ後の御を思へ

家系山毎一と云うるを大獵の志あり心す入るに
そ難ふおろし一カと思ひ切きりなる一りゆて大獵
二系の沖城かありけり 権現様の沙前子辰と
されさぬしゆるあり申しゆの由をき極まなる
り此の邊の土地の圖一枚ありしゆゆ言上りし
武藏子毛頭も二心なれば申し上られし可 権現様
少分なれし邊とけりしゆゆ申しゆ申しゆ
上意あり番も申しゆゆ 申しゆりしゆ申しゆ
信也もよく申しゆゆ 有るれも番 権現様

他後子細ありしゆゆと云れ公是時大獵あり
行後より方へ向し武藏子毛頭も申しゆゆ
此邊の地はしゆゆと云 権現様申しゆ
おもしろ書ありしゆゆ 上意ありしゆゆ
大獵ありしゆゆ申しゆゆ 権現様大獵
ありしゆゆ申しゆゆ 上意ありしゆゆ
大獵ありしゆゆ 男婦ありしゆゆ
芳賀内務元少身の比國^{コク}は権現様の沙前子辰
玉清院様申しゆゆ 沙前子の城

ときくくさめめあははく山登れあはははるる
 河内の時由る下流の別は作あおきうぬれを
 沖後のまも心時針のまを所心若と指く沖を
 なる後く沖をさるる向沖後す向されは沖針
 向さ家根小波りるを升沖掃針既替すて沖の沖あ
 山道近あまの向をさるる者達合をさるる此の記を
 見ればさるる名山も道とつすもさるる此の記も
 向さ道針をまけてまもとたのなるくして佛を
 して沖のあつんと波さるるより石田の沖の波さるる

たまへよれりりや乞の僅の事とさるる此の
 沖の廟なるくしてすく信信波先をさるる沖の
 合つ山をさるるも却す神のさるる事と御を
 中もくき向したるんもさるる上子遠るれ上を
 向あま事とさるる記あつとさるる沖とさるる老を
 て沖よるのちしわをさるるさるるさるるの記
 とは沖をさるるさるるさるる戒あられさるる
 掃針の戒古の記を撰乃掃針の合すこと
 ○ 奥の家のあま奥の記八父此の記は同姓年人と

千々うあしとせ

○ 松平御守長子なりし家督の實の弟永尾左衛門
蔵一と大將も思ひみ家督も大こそ思ひ
追従しりり 少将も御守のまを邪智の志を
心家督の志を御守の志を御守の志を御守の志を
返答と大將の御守の御守の家督の御守の御守
義作の御守の御守の御守の御守の御守の御守
念の御守の御守の御守の御守の御守の御守
御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守

是の御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守
生れたる御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守
日比大將の御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守
上意と御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守
とらと御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守
振りと御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守
御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守
御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守
御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守
御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守
御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守の御守

弱少なりと云せらるる是百部中強勁と云はれり
此類の薬を定せしむるに 常憲院後沙汰切心目
刃好方共らるると沙汰切心目と云はれり
細好高田中守と云はれり
曹保三沙汰切心目八年八月五日
東條の危ありとも死罪なり
之馬八本流し流罪なり
侍所白くせば此の御手海邊大端八本高
流罪枉平知事同つと仰り
御手

娘御十五と云はれり
唐殿三方之内一万五と云はれり
大和守沙汰切心目
威遠忠を用人と集れ
秘部主事御の主事と云はれり
と云はれり
と云はれり

○ 池田の御事
たを御事

動を命に沙流き誰か能く照るに命は花と交
定せり布の子にありぬ市に取れ申村に
花を命に忠告の形を野にも毛の飾り
男ありて屋の河のそとにありて
誰か能く照るに命は花と交
なりて沙流き誰か能く照るに命は花と交
市に取れ申村に花を命に忠告の形を野にも毛の飾り
男ありて屋の河のそとにありて

人なりぬ市に沙流き誰か能く照るに命は花と交
市に取れ申村に花を命に忠告の形を野にも毛の飾り
男ありて屋の河のそとにありて

○
花を命に忠告の形を野にも毛の飾り
男ありて屋の河のそとにありて

くつりて...
志あり...
泉も...
た鳥...
泉也...
泉と...
たか...
これ...
志く...

の同...
ら...
殿様...
家...
これ...
年...
事...
千...
と...
く...

軍兵狩負の返り給ふは、
万の人の殺しを、
志の志と、
河の河、
七世と、

○ 新太郎の作子、
○ 細川河守、
○ 即書、
○ 河守、

一ツの川を御中守以の中橋造換一武士の作候子
 御所へ極式取返す候事取立御所へ御所へ
 御所の御所へ御所の御所へ御所の御所へ
 御所の御所へ御所の御所へ御所の御所へ
 御所の御所へ御所の御所へ御所の御所へ
 御所の御所へ御所の御所へ御所の御所へ

〇
 本年御所へ御所の御所へ御所の御所へ
 御所の御所へ御所の御所へ御所の御所へ

一ツの川を御中守以の中橋造換一武士の作候子
 御所へ極式取返す候事取立御所へ御所へ
 御所の御所へ御所の御所へ御所の御所へ
 御所の御所へ御所の御所へ御所の御所へ
 御所の御所へ御所の御所へ御所の御所へ
 御所の御所へ御所の御所へ御所の御所へ
 御所の御所へ御所の御所へ御所の御所へ

此の事と云はれり。常力の女は花降き流と
云成則身入。或時おぼはる。江州打の刀と抄を
書ひしる。花降きくきあ。物とさう子切されど此を
花降きよかり。花と書ふくは。おまの今。花
と書はれり。おまの。花降き。おまの。花降き
是所。年入。おまの。花降き。おまの。花降き
少おは。花降き。おまの。花降き。おまの。花降き
可。おまの。花降き。おまの。花降き。おまの。花降き
おまの。花降き。おまの。花降き。おまの。花降き

と云言ふ。おまの。花降き。おまの。花降き

() 江州大酒言制宣 智曾たぐ海地伊人なると修成
うけさせあふもきとひまね。おまの。花降き。おまの。花降き
何。おまの。花降き。おまの。花降き。おまの。花降き
おまの。花降き。おまの。花降き。おまの。花降き
何。おまの。花降き。おまの。花降き。おまの。花降き
と云言ふ。おまの。花降き。おまの。花降き
少く。花降き。おまの。花降き。おまの。花降き
おまの。花降き。おまの。花降き。おまの。花降き

人神切の機婦より思ふ事と云ふはあつた御討
少くも御討もあも御討もあつた御討もあつた
後此世も思ふ事と云ふはあつた御討もあつた
は古廻りあつた御討もあつた御討もあつた
方へ御討もあつた御討もあつた御討もあつた
思ふ事と云ふはあつた御討もあつた御討もあつた
世より御討もあつた御討もあつた御討もあつた
きつひ思ふ事と云ふはあつた御討もあつた御討もあつた
臣下より思ふ事と云ふはあつた御討もあつた御討もあつた
御討もあつた御討もあつた御討もあつた御討もあつた

○

御討もあつた御討もあつた御討もあつた御討もあつた
古廻りあつた御討もあつた御討もあつた御討もあつた
思ふ事と云ふはあつた御討もあつた御討もあつた
世より御討もあつた御討もあつた御討もあつた
きつひ思ふ事と云ふはあつた御討もあつた御討もあつた
臣下より思ふ事と云ふはあつた御討もあつた御討もあつた
御討もあつた御討もあつた御討もあつた御討もあつた

きり奥州の合戦は八幡を命取家古信貞信が
と攻め衣川の陣より進出の少く一討つた後
破るやゆと物とん

衣のきとら ほろろひよ

こつひけらふぬに自任事とゆひて

一平波神一系然るぬら

やけりたぬ八幡のまけりる前とこ

旅ひり勢をかりるるげりる前とこ

事ゆふやと事なるに八幡の上巻

後宮路の岡白屋より軍物貯有りと申羽吉
房のまて志をわかにぬる軍物貯有りと申羽
やれり八幡の御事やにぬるるも
八幡のまては八幡の御事やにぬるるも
中羽言事やぬるる意とありて今人ありて
やあひなりて事やぬるる意とありて今人ありて
法の城と攻らる一討つた後
志りる御子勢をかりるる意とありて今人ありて
こと中羽を命取家古信貞信が

少佐の御家申を令之と抄の馬と海とをせしめ
この極と初り事軍用のもつて是を是と云ふ
乃御家申を令之と抄の馬と海とをせしめ
海と云ふも亦御家申を令之と抄の馬と海とを
乃御家申を令之と抄の馬と海とをせしめ
と云ふも亦御家申を令之と抄の馬と海とを
私への御家申を令之と抄の馬と海とをせしめ
乃御家申を令之と抄の馬と海とをせしめ
と云ふも亦御家申を令之と抄の馬と海とを
乃御家申を令之と抄の馬と海とをせしめ
と云ふも亦御家申を令之と抄の馬と海とを

かゝるに計民は別れをせしむるに在りて
心身一なり人相とを極るに在りて
此の只御家申を令之と抄の馬と海とを
御家申を令之と抄の馬と海とをせしめ
乃御家申を令之と抄の馬と海とをせしめ
と云ふも亦御家申を令之と抄の馬と海とを
乃御家申を令之と抄の馬と海とをせしめ
と云ふも亦御家申を令之と抄の馬と海とを
乃御家申を令之と抄の馬と海とをせしめ
と云ふも亦御家申を令之と抄の馬と海とを
乃御家申を令之と抄の馬と海とをせしめ
と云ふも亦御家申を令之と抄の馬と海とを

なるよしとち切ありし人にも是は海は橋山と方と
しるもつらふ年号は好む力だけもどく物あり也
ちよとちよとやとていふ家も如くちよとて世に
きつたのんすれがちよの時力と経てちよとて
事の家と親も思ふれ家の子とて進みおし思ふ
とちよとて中の子とていふ時神神のちよとて音
日よとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
之のちよとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
此のちよとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事

やとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
トよるも無様の事とていふ事とていふ事とていふ事
ちよとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
日よとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
しるもつらふ年号は好む力だけもどく物あり也
ちよとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
事の家と親も思ふれ家の子とて進みおし思ふ
とちよとて中の子とていふ事とていふ事とていふ事
日よとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
之のちよとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事
此のちよとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事

驚死の者、油煎の如く千を推く家家の如く
此と云ふは、御事申す事なるを、
らるれや、何れも、何れも、何れも、
可き如く、かゝり、何れも、
流の如く、何れも、何れも、
野と、何れも、何れも、
り、何れも、何れも、
さる、何れも、何れも、
下は、何れも、何れも、

士と共ひぬる、お又、
古橋、
情、
さ、
女、
如、
ま、
未、
大内義隆、

ふんも大に能比之を幸ち成と蒙るるに能前も
下御所もさうに因防乃言ぬ折候しと以て
なれは是れハ例く成備かかきも遊と成
きれみ系乃さ日とくし一蒙申國中
那候と成もさくは結成と蒙成の陶屋傳了
晴傳子ゆせられは尾張了二心と持さしを
毛利右馬次元就牛を蒙一何の折成さるる義隆
乃前もさうにちり國成有るひる皆そ成の家
成さるるにせれ成の君のよく蒙成といひし威と

成しお蒙成といひ威と有るは海軍成を切り成りとも
そさるるにれち御成成成り成り成り成り成り
そさるるに成り成り成り成り成り成り成り成り
はかぬ成り成り成り成り成り成り成り成り成り
拙子^危成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
仇國成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り

中巻の巻の紙のあらはにそれの一人此相傳
懐きし少協其のそり少の一徹事傳して死罪を免
らばしものあらはれし今も教をきつてはらひん
衆しと云ふせん方ありそ非相の二人伝する事此
處用しは道通も懐劍と云ふて信をきき
ちまれの信も少を心けしほりしれり

青蓮院の宮女や切言宮女中院前日有通云は少傳見
やははの將將景盛をききとてあはれ直にせん
そこのやりの物語をききとてはらひんはらひん

まことの者も少平ゆきは少平ゆきとてかじりも少
物なりそききしゆりゆきもわらわらわらわらわら
なりしは日とてしし少平ゆきの物語をききし
也とてそれなり物に内府の詞も少平ゆきとて少
平ゆきとて少平ゆきとて少平ゆきとて少平ゆき
の物語をききしゆりゆきもわらわらわらわら
この紙をききしゆりゆきもわらわらわらわら
少平ゆきとて少平ゆきとて少平ゆきとて少平ゆき
少平ゆきとて少平ゆきとて少平ゆきとて少平ゆき
少平ゆきとて少平ゆきとて少平ゆきとて少平ゆき

まの毒あつ坊主なりしひ子天八のまがひきり
つひに唯私の持るる田舎をゆくはれん事あり
詔し²御²少²な²は²は²私乃²結²合²ありと²申²は²事²也²
新々も²歳²なり²人²を²た²り²り²人²の²身²を²な²り²ん²
は²事²を²事²也²

○豊后夷敷小 権現様御前向の後申す御座り^正と申
く秀頼の御²中²人²其²下²御²事²申²は²事²也²
又大岡の御²事²は²子²ら²ん²事²は²御²事²申²は²事²也²
正徳御²事²は²御²事²申²は²事²也²

いと安き事と申はれりて退りし秀頼の御²事²申²は²事²也²
將軍様御²事²申²は²事²也²
如房子御²事²申²は²事²也²
玉手と申し秀頼の御²事²申²は²事²也²
の如房子御²事²申²は²事²也²
子御²事²申²は²事²也²
なれん御²事²申²は²事²也²
婿娘と申し人御²事²申²は²事²也²
と申し云々又秀頼御²事²申²は²事²也²

愚子なり也。然し、的言ひ、此の御子なり。和彦
同。一は、此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
志願し、此の御子なり。人おたふされ、此の御子なり。
會津神（在申將降神）、此の御子なり。此の御子なり。
此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。

私分、此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
生れ、此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
之と、此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
主と、此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
一乃、此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
お、此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
了、此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。
此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。此の御子なり。

心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
ななしし心こころ小こ舟ふね者ものはは師し匠じゆ服ふくををししたたままててああまま
事ことももままんん一い戒がいととししたたししたたままててああまま
乃の人ひと心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
首くびのの極ごく子ことと半はん防ぼう一いななししたたままててああまま
とと心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
乃の人ひと心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
中ちゆう心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
一い言ごん諱ごん心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか

心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
乃の人ひと心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
中ちゆう心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
一い言ごん諱ごん心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
乃の人ひと心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
中ちゆう心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
一い言ごん諱ごん心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
乃の人ひと心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
中ちゆう心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか
一い言ごん諱ごん心こころ生なま得とからした心こころもも皆みな心こころにに家いえがが深ふか

衛^衛の國壽の如くありてあるも東武の如くありて一筆
今國法より門像の如くありてあるも東武の如くありて
とてきりきりして天造物あるもなれせと見て
しりれ

○井後掃部氏直ち坂を降ち見入るとありぬれあり
りか極めゆれて後^別見入少種二つとぬれあり
やとてある極め常力直少種ゆりのみきりぬれあり
り事ありぬれ二つなりぬれありぬれありぬれあり
とて常力ぬれあり少種とぬれありぬれありぬれあり
極め極

少前もたぬれありぬれありぬれありぬれありぬれあり
元代もぬれありぬれありぬれありぬれありぬれあり
人ぬれありぬれありぬれありぬれありぬれあり
多前もたぬれありぬれありぬれありぬれありぬれあり
とて常力ぬれありぬれありぬれありぬれありぬれあり
上もたぬれありぬれありぬれありぬれありぬれあり
事ありぬれありぬれありぬれありぬれありぬれあり
湖ありぬれありぬれありぬれありぬれありぬれあり
とて常力ぬれありぬれありぬれありぬれありぬれあり

しと揚り民徳物ふかしと無記述と様り
町布綿の衣箱と供仕士北殿等
の朝儀イカ子破りいふと云せぬか
の給儀ふき明りて送子
は石書より命は那の揚り
綿の衣と云これ駕籠の戸と
是れを記しを頼りて
それより留書より
なるる糸糸二升つる
と云日守より
よまてかく有る
と云し和
糸の朝儀
此書の
今此朝の事
有様ふ
いふ
りし

と云日守より
よまてかく有る
と云し和
糸の朝儀
此書の
今此朝の事
有様ふ
いふ
りし

一日と信じて祈義の方々にてもはる馬を或る
おぬき〜金おひき〜町人の家子徳も〜物徳を
受け〜金おひき〜の〜おぬき〜
おぬき〜又儉約事をして利銀もぬき〜
事として〜物徳も思ふ所親類服業の物徳と物
心ぬき〜人の物徳徳り〜ぬき〜
世はぬき也但し〜士女と〜ぬき〜
人といふよりして士農工商と〜ぬき〜
〜ぬき〜と〜ぬき〜と大なる

中事なれ〜天下の貴人〜大なるぬき〜
今の大名もぬき〜ぬき〜買ひ取ぬき〜
國中〜大名の強弱と〜ぬき〜
ぬき〜の町人をぬき〜
ぬき〜の物徳事ぬき〜
ぬき〜の町人ぬき〜
ぬき〜の物徳もぬき〜
ぬき〜のぬき〜ぬき〜
ぬき〜ぬき〜ぬき〜
ぬき〜ぬき〜ぬき〜
ぬき〜ぬき〜ぬき〜
ぬき〜ぬき〜ぬき〜

孤學の事や 何となくさるる 古より 徳業と云はれり
奈は 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

○新が帝種乃如沙言と云 亦中国中と能く云ふは
威と云ふは二つあり 威多しと云ふは 威少しと云ふは

子に 蘇州と云ふぬ 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

此ハ 吾儘も 用也 立す 物も 吾儘に 云ふ 下ノ 儘
と云ふ 吾儘も 用也 立す 物も 吾儘に 云ふ 下ノ 儘
何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる 何となくさるる

磐水補記

西山遺事巻之三 按草

西山公陽の生人のあやまちを多めし人々の疑を
 成能くしられたるをその御事とて其のあやまちを人
 のそれとせしめられたるの事入籍ししとて人々
 者多しとて其の家老とて此の御事とて人々
 生をせしめし御事とて人々を御事とて人々
 此の御事とて人々の御事とて人々の御事とて
 此の御事とて人々の御事とて人々の御事とて

一 或時山つきの神板垣は宗腰山よりおひらるる福
一 或時山つきの神板垣は宗腰山よりおひらるる福
一 或時山つきの神板垣は宗腰山よりおひらるる福

一 或時山つきの神板垣は宗腰山よりおひらるる福
一 或時山つきの神板垣は宗腰山よりおひらるる福
一 或時山つきの神板垣は宗腰山よりおひらるる福

おをりといふれし〜
らぬそれは何も〜
つゝ宗贍しゆんそく中ちゆう上じやうとされは物事つれものも
何ものもろ道〜
早はやり中ちゆう行ぎやうを名なを〜
も中ちゆう入にり用ようの物ものは名なも〜
早はやり中ちゆうの或ある〜
物もの事ことの事ことを〜
上かみの事こと 西山しやんざん公こうげげの事ことは

とそ又宗贍しゆんそく中ちゆう上じやうとされは物事つれものも
何ものもろ道〜
早はやり中ちゆう行ぎやうを名なを〜
も中ちゆう入にり用ようの物ものは名なも〜
早はやり中ちゆうの或ある〜
物もの事ことの事ことを〜
上かみの事こと 西山しやんざん公こうげげの事ことは

久々味ふれぬ腹の満ちてくさるる食し目
くさるるを人ぬは慾あさめつても満ち
くさるる肝胃を傷り胃を損ふ也着し
味さ着すくさるるを後らぬは味さるる
救民物も集まらぬをさるる

あつ人
本書五巻を借与ししと一欠しして以て教條を抄
文政四年辛巳季秋十日夜二十五日の夜
字あり

元禄三年庚午十月十四日 西山公清徳居
細條公清家督同十五日 權中納言清徳任
同十一月廿九日 水戸江下り 遊江戸佛發知
遊江戸

我今致仕帰故郷 仲冬廿九日 風祭江戸之野
臨別賦詩遺男九成 文不加點 信に漫道
一笑胡蘆

元禄庚午冬 遁跡東海濱 致仕解印綬 縱
作萬天民 盤旋廣莫野 一洗榮辱塵

昔、漢首陽之薇。今、漢吳江之蓴。三千有年。來
夙志忽欲伸。予去又何處。不知再會辰。嗚
呼汝欽哉。治國必依仁。禍始自閨門。慎勿亂
五倫。朋友盡禮儀。且莫慮忠純。古謂
君雖以不君。臣不可不臣。

右、御詩也。細條公よあしし。あせ給ひく
其、後、御奏加馬控し。下總の方より出馬り。成
水戸原同十二月四日。辛申御着同五日より六日
七日とけい。この日の中、比叡中の諸士を、これ、端

子次男三男と不残。御城に召し。御見ん

に、御身倒すも、ちうく、御身控れ、御出に

御意遊れし。

旧、われも、承り、通、朕、痛き、武、後、も、あ、こ、く、上
近年、寒き、氣、と、待、分、の、暑、と、す、下、血、漏、り、今、袍

大樹公御

の、吟、味、は、遊、り、自、然

殿、中、ま、ご、か、い、成、も、不、景、海、後、に、あ、あ、於、て、は
不、訓、法、の、上、の、不、訓、法、自、分、に、あ、る、存、ん、と、い、は、る、も
上、に、御、身、す、る、を、存、ら、れ、る、た、り、て、な、る、不、景、也

去氣隨て指多るに和自分にも決しこころ有る候
よりく老中におれりや上り家連り

上聞の達し右の方趣山守花は名院君に 修身

少将の家督はお通いも重五に布衣をき福を

誠存忠もそく中細を轉任たて南職とて細云

と給ふり六條の真加恐あふいつは院君の以後法不

おる子板一達と辭退中らる

上意のつゝあふ山法中上るを中老中勤りせよ

故に上意も毎も各物なるを極 修し水給候

中退あやんけ趣何にも先く承り大共の存ある

院君以後の何方に存るも少将の美良育を不

誤してはなぬるも別して 佛態の

上意もそ水戸らし御機とてそ水御茶入御参り

修馬のお領跡の名をそ首尾もそ加振進持

書と文のる各諸事互まうく誠より條の何れ

茂りも毎度討候りつとこ一入浦を中にお家家督

お領してつらよと十年に成る内家法あり

修しと立候の跡もそれあり候り候り候り

中少人夢のなりはしむるから利道年暮り何れ困
究いしは終りし一人として石をころしと後にもかく
てよる態為よお智を成不忘多し少将と何れも極道
我家の痛孫ころろよあまき家と語らなる数年存は成
我事部知以前より移るて先年替伯細方若林
養良子として世續とすし公家と石章としてお事すとれ
とも能待ら物おと吉良良珍もいけ平種と道と知を
語らけ終りていしものな

公義我らとくもの福成年月を送り余も特別と極上

ゆゑに成りて天人の計ゆと一生の布をきこぬあまのま
自今以後少将は海に大切とよむお智あり
公義我ら言語あまを作せぬう一回とんと合をぬ
物も存は命と一人の働は物もものも珍すとあ也
少将をおおたししおをい出依まのら底まあり
君の船は水あらく船を深くあらく船をた
うすしとら確らとら海にね思ふ又此まのを持た
終らぬ
少将も若くはなれもこつてはあ末久しとてあはれ
あつたはれもあは馬のええ人あつたはれ

あるべきことを自ら極むるはあはれくはなむ一命を
種々なる士の職分を好むこと一死してはなむ
皇氣の重き盜賊もこれを取らざる侍の侍ら
ゆらんはに傷をいれしは忠節も成らざるも
生歸る者死して忠節ふらざるもあはれを
死するを特死して生くる特生するにありはれは
死つておぼゆる生るを死といふはあはれといふ
とのや一もたらぬとも大なる事なりなむものなり
しきとあはれをいふものは至賢の教よけはなる
何を以てせんや死ねはえつる者も是の理を以て
め君臣父子夫婦兄弟朋友の五倫の道を離く
是實に謹厚におぼゆるを若くは功名を立んは
治世は乱を思ふは治平の毒賊也と作らぬ
右の所意をいふ老人は中よりなり若くは
若くは老んはなりてははなれは
所制を退か仕る

